アジアにつながる文化の橋！

地元の若きクリエーターと映画ファンが集まる！ ジョグジャカルタ「9th JOGJA-NETPAC ASIAN FILM FESTIVAL」映画祭

2015.03.18

6 ツイート 0
LINE 1 G+1

2014年12月1日から6日まで、インドネシアの古都、ジョグジャカルタにて「9th JOGJA-NETPAC ASIAN FILM FESTIVAL」映画祭が開催されました。

場所で交流場所をする未来者たち

ジョグジャカルタとは、インドネシアの首都ジャカルタから南東に400キロほど離れた場所にあります。「インドネシアの京都」と呼ばれるとこちらも歴史的な名称で、王宮をはじめとした美しい街並みやさき良き文化を今に伝えています。

映画祭会場の周囲には、夜空や地平でも地オオテントなどの、ジャムルヤ（はまちのもとになったニーホルル笛）が揃えています

今年で第四回を迎えるこの映画祭は、映画監督であるリアード・ディレクターでもあるGarin Nugrohoさんが主事しています。元々は、現の家に映画ファンが集まって熱い映画談義を交わしていたのが始まりで、そこから発展して今の映画祭へ形になりました。Garinさんによると「メジャーな作品だけでなく、マイナーな作品も発表できる場所が必要だと強く思ってこの映画祭を立ちよけました」とのこと。

まちこの映画祭は、地元の学生アーティストや映画ファンらがスタッフとして参加して作りはげていく姿を多く見かけました。アートを知識することができる大学が多くあるジョグジャカルタらしく、映画はもちろん、音楽、イラストレーター、ダヴィアー等々、映画祭には若なアーティ的要は全て学生や、地元のアーティストに依頼しているとのことです。そういった要素が映画祭の魅かさ、地元らしさを醸し出しているのを強く感じました。

今回は初のゴルとして、この映画祭と国際交流基金ジャカルタ日本文化センターとの共催で日本映画特集を開催しています。昨年初一度者の「そして父になる」、御法川修監督の「入魂いろどり」や、吉田康弘監督の「男五ちの高校一生日の春」、山下敦弘監督の「もしかしあたマ学ア」、小林武監督の「日本の美術」を上映するとともに、御法川修監督、東京国際映画祭事務局プログラミング・ディレクターの石坂国さん、サウンドデザイナーの森永泰弘さんを迎えてのイベントも行われました。

御法川さんと石坂さんは、Taman Budaya Yogyakartaの会場にて、この映画祭の主事であるGarin Nugrohoさん、ディレクターのBudi Irawanto さんと共に「日本の近代映画」をテーマにしたお関講演を行いました。

Budiさんや映画スタッフは過去に東京国際映画祭のために来日したことがあり、これまでも何度さんを始めとした日本の映画関係者との交流を持ってきました。それもあり松やから世間をの中でスタートしたこの関講演でしたが、話題が映画の未来に及ぶと、少々緊張した雰囲気になりました。

石坂さんは、「日本では映画関係で映画を観るのは高齢者ばかりで、若い人たちが減っているのが現状です。一方で、映画を作ることに興味をもつ若い人は増えているのですが、自分の作品を作ることに夢中で、他人の作品に興味を持たないし、が多い印象です」と、視野を広く持つことの重要性を訴えました。

熱く未来者に語りかける御法川監督

これを受けて御法川監督は、「映画制作というのは、まさに『生きている人間に興味を持つ』ということです。私は、出演者やスタッフとの新しい出会いのために映画を作っているとも言えます」と、映画制作を通じた人との関係の大切さを力説しました。

映画を愛するからこそ映画の未来について真剣に語る、その姿弧感が観客にも伝わった公開講演でした。

この後、さらなる盛り上がりを見せたのが、御法川監督の作品「人生、いろどり」の上映会および質疑応答でした。

この映画は、過酷な高齢化が進む徳島県上勝町の実話を元にしています。ひ深れる美しい言っぱを料理がつまるものとして観想する「彩（いろどり）」という新しい事業を立ち上げた住人たちが、様々な苦難を乗り越えて事業を成功に導く物語です。

夫婦や家族を通じた人と人との絆が描かれており、登場人物のカップルが「（いよいよロボーズか？）」というシーンでは観客全員が生唾んで見守り、男性からではなく女性がプロポーズするという結末にはドッと笑いが起きていました。

感想を語る女性

インドネシアの此方都市、バンドンから駆けつけたという学生たち

女性の観客からは、「インドネシアにも重っぱなど頑張り結工をするという伝統があります。そこに日本との共通点を見つけて興味深かったです」「ケンカをしながらも、絆を深めて行くカップルの姿を見て、私もあんな風なカップルになりたいと思いました」
といった感想が聞かれました。

上映後の御法川監督と参加者の方々との交流場面

映画祭最終日には、国際交流基金ジャカルタ日本文化センターを始めとした協賛団体への感謝状が贈呈されました。

感謝状を渡される、国際交流基金ジャカルタ日本文化センターの高原氏

御法川監督は映画祭の短編映画部門の審査員も務めていて、Tunggul Banjaransariさんの作品「LUDHAR」を「Bleincong Awards」として選出しました。その理由を監督は、「『LUDHAR』は、一言ではお説できない不思議な映画なのです。映画を楽しんでいる気持ちが一番伝わってきた作品だった。」と選評で述べました。

受賞したTunggul Banjaransariさんの代理で感謝状を渡される高橋

授賞式を最後に、映画祭は大盛況のうちに幕を閉じました。ジョグジャカルタは大学も多いため、会場には連日多くの若者の姿が見たり、公開講演に真剣に聞き入り熱心に質問をする姿からは、「将来映画に関わる仕事をしたい」、そのためのアドバイスをぜひ教いて頂けたい」という、切実な思いが伝わってきました。

この映画があれば、ジョグジャカルタから新しい映画監督や作品が出てくるのはそう遠くないだろうと感じます。来年は10周年。まだまだ訪れてその記憶を抱き続けてみたいと思えた映画祭でした。

全国名称	9th JOGJA-NETPAC ASIAN FILM FESTIVAL
日時	2014年12月1日（月）～12月6日（土）
会場	Taman Budaya Yogyakarta,Empire XXI Cineplex & Bentara Budaya Yogyakarta他
主催	JOGJA-NETPAC ASIAN FILM FESTIVAL FOUNDATION
共催	国際交流基金ジャカルタ日本文化センター（アジアセンター事業）ほか
URL	http://jaff-filmfest.org/

中村麗花：フランス・パリを拠点に活動するフリーライター。著書は、世界で絶品の酒をしながら哲学・結婚事情をレポートした『世界酒道』（朝日出版）、毎月コンテンツ・サイト「cakes」にてパリの食旅の日常をレポートする「すっぽんぽんパリ」連載中。https://cakes.mu/series/3055

6 ツイート 0
LINE 1 G+1

アジアにつながる文化の橋！